



ステップスギャラリー、オーナー吉岡まさみがその時の旬のネタ=人=お気に入りを入りを「みせびらかし、披露する」ファブリット展である。今回はミハイロ・カラノヴィッチ、石原ケンジ、川辺美咲、佐藤全孝、達和子、田邊光則が選出された。佐藤は5月、達は3月、石原と田邊は昨年10月にステップスで個展を開催したばかりだ。ベルリンに住む川辺とセルビアのミハイロは初参加であろう。個展を開催した四者は、その時の作品と同じか、違うかという問題ではない。その時の熱気を残したままであることが重要なのだ。懐かしいのではなく、新しいことが求められる。この難題を四者はクリアしたと私は思う。

ミハイロの鳥は、鳥でなくて鳥である。川辺の《ノスタルジック・ヘンタイ》は下着が描かれ、確かに変態であっても郷愁にそそられる。現実が分からなくなる。何が新しく、何が古いのかは問題にならない。自己に対して常に挑戦し続ける姿が大切なのである。その意味で、ミハイロも川辺も目に見えない未来に対する模索を繰り返している様が、ここに展示された作品から感じられた。このような優れた展示を見ると、展覧会とは何かを改めて考えさせられる。異なる作品が混在しても、全く違和感が生じない。我々は吉岡の目になったのではなく、吉岡の頭の中をさ迷っていくのである。それは未来の思考だ。

